

磯部の若葉

岡本綺堂

青空文庫

今日もまた無数の小猫の毛を吹いたような細かい雨が、磯部の若葉を音もなしに湿らし
 ている。家々の湯の烟も低く迷っている。疲れた人のような五月の空は、時々薄く眼を
 あいて夏らしい光を微かに洩すかと思うと、またすぐに睡むそうにどんよりと暗くなる。
 鶏が勇ましく歌つても、雀がやかましく囀つても、上州の空は容易に夢から醒めそうもな
 い。

「どうも困ったお天気でございます。」

人の顔さえ見れば先ずこういうのが此頃の挨拶になつてしまった。廊下や風呂場で
 出逢う逗留の客も、三度の膳を運んで来る旅館の女中たちも、毎日この同じ挨拶を繰返し
 ている。私も無論その一人である。東京から一つの仕事を抱えて来て、ここで毎日原稿紙
 にペンを走らしている私は、他の湯治客ほどに雨の日のつれづれに苦まないのであるが、
 それでも人の口真似をして「どうも困ります」などといつていた。実際、湯治とか保養と
 かいう人たちは別問題として、上州のここらは今が一年中で最も忙がしい養蚕季節で、
 なるべく湿れた桑の葉をお蚕様に食わせたくないと念じている。それを考えると「どうも
 困ります」も決して通り一遍の挨拶ではない。ここらの村や町の人たちに取っては重大の

意味を有^もつていることになる。土地の人たちに出逢つた場合には、私も真^ま面目^めに「どうも困ります」ということにした。

どう考えても、今日も晴れそうもない。傘をさして散歩に出ると、到る処^{ところ}の桑畑は青い波のように雨に畑^{はた}っている。妙^{みょう}義^ぎの山も西に見えない、赤城^{あかぎ}榛^{はるな}名も東北に陰^{くも}っている。蓑^{みの}笠^{かさ}の人が桑を荷^{にな}つて忙がしそうに通る、馬が桑を重^{おも}そうに積んでゆく。その桑は莚^{むしろ}につつんであるが、柔かそうな青い葉は茹^ゆられたようにぐったりと湿^ぬれている。私はいよいよ痛切に「どうも困ります」を感じずにはいられなくなつた。そうして、鉛のような雨雲を無限に送り出して来るいわゆる「上^{じょう}毛^{もう}の三名山」なるものを呪^{のろ}わしく思うようになった。

磯部には桜が多い。磯部桜といえば上州の一つの名所になつていて、春は長野や高崎前橋から、見物に来る人が多いと、土地の人は誇つている。なるほど停^{てい}車^{しゃ}場^{じょう}に着くと直^{すぐ}に桜の多いのが誰^{たれ}の眼にも入る。路^{みち}傍^{ばた}にも人家の庭にも、公園にも丘にも、桜の古木が枝をかわして繁つている。磯部の若葉は総て桜若葉であるといつてもいい。雪で作つたような白^{つばき}い翅^さの鳩の群が沢山に飛んで来ると湯の町を一ぱいに掩^{おほ}つている若葉の光が生きた

ように青く輝いて来る。護謨ごもほうずきを吹くような蛙かわずの音が四方に起ると、若葉の色が愁さむうるように青黒く陰くもつて来る。

晴つかいの使として鳩の群が桜の若葉をくぐつて飛んで来る日には、例の「どうも困ります」が暫しばらく取払われるのである。その使も今日は見ええない。宿の二階から見あげると、妙みょう義道ぎみちにつづく南の高い崖路がけみちは薄黒い若葉に埋められている。

旅館の庭には桜のほかに青梧あおぎりと槐えんじゆとを多く栽うえてある。瘦やせた梧きりの青い葉はまだ大きい手を拵ひろげないが、古い槐の新しい葉は枝もたわわに伸びて、軽い風にも驚いたように顛ふるえている。その他には梅かえでと楓つつじと躑躅つづじと、これらが寄集よりあつまつて夏の色を緑に染めているが、これは幾分の人工を加えたもので、門を一步出ると自然はこの町の初夏を桜若葉で彩いろどろうとして直すくに首肯うみなずかれる。

雨おやみが小歇おやみになると、町の子供や旅館の男ぼうきが箒たいまつと松明たいまつを持って桜の毛虫やを燻やいている。この桜若葉を背景にして、自転車たが通る。桑たを積んだ馬たが行く。方々の旅館で置替たえを始める。逗留客なが散歩に出る。芸妓げいしやが湯ゆにゆく。白い鳩うが餌えをあさる。黒い燕おうらいが往来おうらいの中で宙返りを打つ。夜になると、蛙ふくろうが鳴く。梟ふくろうが鳴く。門附かどつけの芸人えいじんが来る。碓氷川うすいがわの河鹿かじかはまだ鳴かない。

おととし
一昨年の夏ここへ来た時に下磯部の松岸寺へ参詣したが、今年も散歩ながら重ねて行つた。それは「どうも困ります」の陰つた日で、桑畑を吹て来る湿つた風は、宿の浴衣の上にフランネルを襲ねた私の肌に冷々と沁みる夕方であつた。

寺は安中路を東に切れた所で、こちら一面の桑畑が寺内までよほど侵入しているらしく見えた。しかし由緒ある古刹であることは、立派な本堂と広大な墓地とで容易に証明されていた。この寺は佐々木盛綱と大野九郎兵衛との墓を所有しているので名高い。佐々木は建久のむかしこの磯部に城を構えて、今も停車場の南に城山の古蹟を残している位であるから、苔の蒼い墓石は五輪塔のような形式で殆ど完全に保存されている。これに列んでその妻の墓もある。その傍には明治時代に新しく作られたという大きい石碑もある。しかし私に取つては大野九郎兵衛の墓の方が注意を惹いた。墓は大きい台石の上に高さ五尺ほどの楕円形の石を据えてあつて、石の表には慈望遊謙墓、右に寛延〇年と彫つてあるが、磨滅しているので何年か能く読めない。墓の在所は本堂の横手で、大きい杉の古木を背後にして、南に向つて立っている。その傍にはまた高い桜の木が聳えていて、枝はあたかも墓の上を掩うように大きく差出ている。周囲には沢山の古い墓がある。杉の立

木は昼を暗くするほどに繁っている。『仮名手本忠臣蔵』の作者竹田出雲に斧九太夫という名を与えられて以来、殆ど人非人のモデルであるように恰く世間に伝えられている大野九郎兵衛という一個の元禄武士は、ここを永久の住家と定めているのである。

一昨年初めて参詣した時には、墓の所在が知れないので寺僧に頼んで案内してもらった。彼は品の好い若僧で、色々詳しく話してくれた。その話に拠ると、その当時この磯部には浅野家所領の飛び地が約三百石ほどあった。その縁故に因つて大野は浅野家滅亡の後ここに来て身を落付けたらしい。そうして、大野ともいわず、九郎兵衛とも名乗らず、単に遊謙と称する一個の僧となつて、小さい草堂を作つて朝夕に経を読み、傍らには村の子供たちを集めて読み書きを指南していた。彼が直筆の手本というものは今も村に残っている。磯部に於ける彼は決して不人望ではなかつた。弟子たちにも親切に教えた、色々の慈善をも施した。碓氷川の堤防も自費で修理した。墓碑に寛延の年号が刻んであるのを見るとよほど長命であつたらしい。独身の彼は弟子たちの手に因つてその亡骸をここに葬られた。

「これだけ立派な墓が建てられているのを見ると、村の人にはよほど敬慕されていたんでしようね」と、私はいった。

「そうかも知れません。」

僧は彼に同情するような柔かい口吻であつた。たとい不忠者にもせよ、不義者にもあれ、縁あつて我が寺内に骨を埋めたからは、平等の慈悲を加えたいという宗教家の温かい心か、あるいは別に何らかの主張があるのか、若い僧の心持は私には判らなかつた。油蟬の暑苦しく鳴いている木の下で、私は厚く札をいつて僧と別れた。僧の痩せた姿は大きな芭蕉の葉のかげへ隠れて行つた。

自己の功名の犠牲として、罪のない藤戸の漁民を惨殺した佐々木盛綱は、忠勇なる鎌倉武士の一人として歴史家に讃美されている。復讐の同盟に加わることを避けて、先君の追福と陰徳とに余生を送つた大野九郎兵衛は、不忠なる元禄武士の一人として浄瑠璃の作者にまで筆誅されてしまつた。私はもう一度かの僧を呼び止めて、元禄武士に対する彼の詐わらざる意見を問ひ糺してみようかと思つたが、彼の迷惑を察して止めた。

今度行つてみると、佐々木の墓も大野の墓も旧のまま、大野の墓の花筒には白い躑躅が生けてあつた。かの若い僧が供えたものではあるまいか。私は僧を訪わずに歸つたが、彼の居間らしい所には障子が閉じられて、低い四つ目垣の裾に芍薬が紅く咲いていた。

旅館の門を出て右の小道を這入ると、丸い石を列べた七、八級の石段がある。登降はあまり便利でない。それを登り尽した丘の上に、大きい薬師堂は東に向つて立っていて、紅白の長い紐を垂れた鰐口が懸つている。木連格子の前には奉納の絵馬も沢山に懸つている。めの字を書いた額も見える。千社札も貼つてある。右には桜若葉の小高い崖をめぐらしているが、境内はさのみ広くもないので、堂の前の一段低いところにある家々の軒は、すぐ眼の下に連なつて見える。私は時々ここにこへ散歩に行つたが、いつも朝が早いので、参詣らしい人の影を認めたことはなかった。

それでもたつた一度若い娘が押んでいるのを見たことがある。娘は十七、八らしい、髪は油気の薄い銀杏返しに結つて、紺飛白の単衣に紅い帯を締めていた。その風体はこの丘の下にある鉱泉会社のサイダー製造に通つている女工らしく思われた。色は少し黒いが容貌は決して醜い方ではなかった。娘は湿れた番傘を小脇に抱えたままで、堂の前に久しく跪いていた。細かい雨は頭の上の若葉から漏れて、娘のそそけた鬢に白い雫を宿しているのも何だか酷たらしい姿であった。私は少時立っていたが、娘は容易に動きそうもなかった。

堂と真向いの家はもう起きていた。家の軒下には桑籠が沢山に積まれて、若い女房が蚕

いごだな
棚いごの前に襷たすき掛がけで働いていた。若い娘は何を祈っているのか知らない。若い人妻は生活に忙がしそうであった。

どこ
何処どこかで蛙が鳴き出したかと思うと、雨はさあさあと降って来た。娘はまだ一心に拝んでいた。女房は慌てて軒下の桑籠を片付け始めた。

青空文庫情報

底本：「岡本綺堂随筆集」岩波文庫、岩波書店

2007（平成19）年10月16日第1刷発行

2008（平成20）年5月23日第4刷発行

底本の親本：「五色筆」南人社

1917（大正6）年11月初版発行

初出：「木太刀」

1916（大正5）年7月号

入力：川山隆

校正：noriko saito

2008年11月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

磯部の若葉

岡本綺堂

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>